

本資料は、報道関係者を対象としています。医療現場や一般の方々を対象とした医学的な情報提供や、プロモーションが目的のものではありません。なお、これらの資料は配信時当初の情報が掲載されており、最新の情報が反映されているとは限らないことをご了承ください。

報道関係各位

2026 年 10 月 13 日

免疫性血小板減少症 (ITP) 診療における医師・患者間の認識ギャップ 調査結果を第 88 回日本血液学会学術集会 (JSH) で発表 -患者は「疲労感の軽減」を重視、医師は「出血症状」「血小板数の維持」を重視-

サノフィ株式会社 (本社: 東京都新宿区、以下「サノフィ」) は、大阪大学医学部附属病院、愛媛大学医学部附属病院、岩手医科大学、株式会社インテージヘルスケアとの共同研究として、免疫性血小板減少症 (ITP) 診療における医師・患者間の認識ギャップに関する調査結果を、2026 年 10 月 9 日から 11 日まで京都府京都市で開催された第 88 回日本血液学会学術集会 (JSH) にて発表しました (演題番号: O1-12D-3)。本調査では、治療選択において重視するポイントには患者と医師の間にギャップがみられ、患者では「疲労感の軽減」を重視する一方で、医師は、客観的指標の「出血症状」や「血小板数の維持」を重視する傾向がみとめられました。さらに、共同意思決定 (SDM: Shared Decision Making) に対する認識にもギャップがみられ、今後さらに患者に応じて治療で「何を改善したい」のか、治療選択に「どの程度関わりたいか」を把握することが重要であることが報告されました。

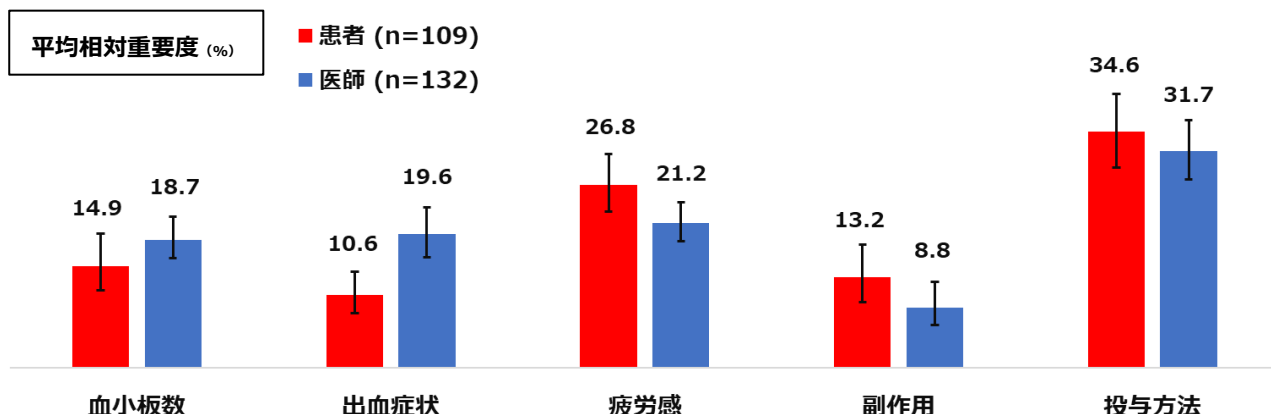
ITP は、自然免疫と獲得免疫の双方が関与する自己免疫疾患です。複合的な免疫調節異常により、血小板の破壊亢進や産生障害が生じ、血小板数が減少します。皮下出血から生命を脅かす重篤な出血までさまざまな出血症状のリスクを伴うほか、倦怠感・疲労感、不安や抑うつ症状、認知機能への影響など、患者さんの生活の質にも幅広い影響を及ぼすことが報告されています*。国際調査 (I-WISH 試験**) においても、「倦怠感・疲労感」は患者さんが最も強く訴える症状・負担の一つとして報告されています。

一方、日常診療では血小板数や出血などの客観的指標を重視した疾患管理が中心となっており、医師と患者さんが治療のベネフィットとリスクをどのように評価し、何を重視しているのかについては、十分に定量化されていませんでした。サノフィは、本邦の ITP 診療における医師と患者さんのより良い SDM の実現に向け、治療に対する両者の認識の違いを把握するため、本調査を実施しました。

■調査結果

①治療選択において重視するポイントにギャップー患者は疲労感の軽減を重視

患者と医師の間に、治療選択時の優先順位に明確なギャップが認められました。



- 患者・医師ともに「薬剤の投与方法」を最も重視し、特に経口投与薬を高く評価
- 患者は「疲労感の軽減」(26.8%)を2番目に重視
- 医師は「出血症状」(19.6%)と「血小板数の維持」(18.7%)を患者より重視し、「疲労感」「出血症状」「血小板数の維持」をバランスよく重視

②疲労感の原因に対する認識のギャップ

- 患者: 疲労感の原因を「わからない」とする割合が最も高く、「疾患(ITP)自体」や「ITPの治療」が原因との認識は低い
- 医師: 疲労感の原因として「疾患(ITP)自体」と「ITPの治療」の両方を認識

患者と医師の間で、疲労感の原因に対する認識にも明確な相違が認められました。

③治療選択への参加状況・意欲

- 患者が認識する治療選択への参加状況:56.9%(医師の認識:74.2%)
- 患者の参加意欲:47.7%(医師が認識する患者の参加意欲:67.4%)
- 治療選択への「関与を希望しない」患者:12.8%

患者が認識する治療選択への参加状況は医師の認識より低く、また患者自身の参加意欲は医師が想定するほど高くないことが明らかになりました。

大阪大学医学部附属病院 輸血・細胞療法部 病院教授 加藤 恒先生

本調査では、ITP診療において医師と患者さんの間に治療目標や症状認識に関するギャップが存在することが示されました。特に、患者さんは出血症状の軽減だけでなく、医師が考えている以上に疲労感の軽減を重視していることが明らかとなった点は重要な知見であると考えています。今回の結果は、疾患活動性や血小板数の検査値や出血症状だけでなく、患者さんが実際に感じている負担や困りごとにも目を向けながら診療を行うことの重要性を示唆しています。患者さんが治療で何を改善したいと考えているのか、また治療選択にどの程度関わりたいと考えているのかを把握し、対話を通じて治療目標を共有することが、患者さん一人ひとりに応じたSDMの実践につながるものと期待しています。

■本研究について

本研究はサノフィ株式会社が企画・実施し、大阪大学、愛媛大学、岩手医科大学および株式会社インテージヘルスケアの研究者との共同研究として実施されました。

■調査概要

調査期間: 患者調査 2025 年 10 月 7 日～2025 年 12 月 26 日

医師調査 2025 年 11 月 21 日～2025 年 11 月 28 日

調査対象: ITP 患者 109 名、医師 132 名

調査方法: 日本全国を対象とした WEB アンケート

調査手法: 離散選択実験(Discrete Choice Experiment: DCE)など

発表学会: 第 88 回日本血液学会学術集会(JSH)、2026 年 10 月 9～11 日、京都府京都市

演題番号: O1-12D-3

*Cooper N, Kruse A, Kruse C, et al. Am J Hematol. 2021 Feb 1;96(2):188-198. /Y. Tsukune, N. Komatsu, Intern Med. 2016;55(17):2379-85.

** I-WISH(ITP World Impact Survey)は、免疫性血小板減少症(ITP)患者および医師を対象に、疾患負担、QOL への影響、ならびに患者・医師間の認識ギャップを評価した国際調査。Cooper N, et al. Am J Hematol. 2021;96(2):188-198. Cooper N, et al. Am J Hematol. 2021;96(2):199-207.

サノフィについて

サノフィは、研究開発型の AI を活用したバイオ医薬品企業であり、人々の暮らしをより良くし、力強い成長をもたらすことに尽力しています。免疫科学領域の深い知見を活かし、世界中の何百万人もの人々の治療と予防を行う医薬品やワクチンを提供し、さらなる貢献のために革新的なパイプラインの構築にも注力しています。「人々の暮らしをより良くするため、科学のもたらす奇跡を追

求する」という使命のもと、医療・環境・社会が抱える課題に真摯に向き合い、社員と国や地域社会にとって前向きな変化を生み出すことを目指しています。

サノフィは、ユーロネクスト(EURONEXT: SAN)とナスダック(NASDAQ: SNY)に上場しています。

日本法人であるサノフィ株式会社の詳細は、<https://www.sanofi.co.jp/> をご参照ください。